

## 聖餐礼拝説教要旨 【2017年5月7日】

### 「心をつくして」

—マタイによる福音書講解説教 92—

申命記

第6章 4節～9節

マタイによる福音書

第22章 34節～46節

説教

岡村 恒 牧師

「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」。これら二つの戒めに律法全体が言い表されていると主イエス・キリストはおっしゃいます。そこに、神の計画全体、私たちの人生全体が語りつくされてもいるのです。

ところで、私たちは、愛する者を失った心の空虚を感じることがあります。阪神・淡路大震災(1995年)や東日本大震災(2011年)で、愛する者が一瞬にして奪われることに、自分の人生が満ち足りたものでないことに気づいた人も多くいたでしょう。大震災に限らず、愛する者を失うときに、私たちは心の空虚を感じます。そのような空虚を満たす言葉が、詩篇23篇4節にある「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れませぬ。あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。」です。

死を前にした本人、あるいは愛する者が死を前にしている人にとって、求める言葉は本当の言葉だけです。その言葉なしには平安のうちに過ごせないような、きわめつけの一言だけが求められるのです。私は、牧師として、これまで数多くの人の死の場面に立ち会ってきました。死を前にした人に伝える言葉として、その人が洗礼を受けた信仰者であるときには「死にゆく人の命も神の手の内にある」と言い、求道者であるときには「あなたの一切を神にゆだねるように」と言い、ほとんど聖書にふれたことのない人には「あなたの家族の信じる神にあなたの魂をゆだねなさい」と言ってきました。ここで伝えようとした気持ちは、先の「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも…」に要約されます。

死の場面に限らず、地上を歩む生活の中で、なくてはならない言葉は何か。それが今日冒頭に掲げた主イエス・キリストの言葉なのです。

主イエスに、パリサイ人からの問いが発せられます。聖書の戒めの中で一番大切な戒めは何か、律法の中でどの戒めが一番大切なのか、一番の中心の言葉は何か、と。それに主イエスはお答えになりました。主イエスのお答えの第一

にある「心をつくし、…神を愛せよ」は、現在でもイスラエルでは、家の玄関やデパートその他の公共施設の入り口に掲げられるほど、ユダヤ社会に定着した言葉です。しかし、主イエスのお答えには、第二の「…隣り人を愛せよ」という言葉が続きます。第一の言葉は神と人間との間での垂直的関係をいい、第二の言葉は同じ人間である隣り人との間での水平的関係をいいます。垂直の関係で神を愛することと、神に創造された隣り人との間の水平の関係で互いに愛し合うことは、一つのことなのです。

主イエス・キリストは、天地創造の時から神とともにおられた方ですから、神がどういう方であるかをよくご存じです。そして、私たち人間がどういう存在であるかもよくご存じです。先の主イエスのお答えにある言葉の上に立てば、私たちは神とともに生きることになるのですが、私たちの心はほかのことに千々に乱れて、その言葉どおりに生きることができません。罪人である私たちは、そのままでは神に喜ばれることはありません。

主イエス・キリストは、先の言葉が戒めとして最も重要であるとお答えになるだけでなく、その戒めの通りには生きられない私たちの罪人としての姿もご存じでした。それで主イエスは、十字架にかかって死んでくださり、罪人である私たちが受けるはずの神の裁きを引き受けてくださったのです。こうして、私たちのために、道を開き、戒めを完成してくださったのです。

ですから、先の言葉は救いの条件ではなく、これらの言葉から私たちは慰めを得ることができるのです。救いの条件は、すでに主イエス・キリストが整えてくださっています。御子イエスを信じる者は滅びないで、永遠の命を得ます。私たちのし残したことがあるとすれば、それは、ただ主イエス・キリストを信じることだけです。

救い主イエス・キリストは、一時的な救いを与えるのではなく、想像もできないような仕方で私たちを救ってくださいます。神は、御子イエスを与えつくすという、おそろしいほどの犠牲を払って、私たちを愛し抜いてくださいました。聖霊なる神が私たちを祈りへと導いてくださいます。主イエス・キリストの祝福を祈りましょう。

(記 説教要約奉仕者)